

論文の内容の要旨

論文題目 魔女とメランコリー

氏名 黒川正剛

西欧で魔女裁判が猛威を振るったのは、16世紀後半から17世紀にかけてであった。魔女とはいかなる存在であったのか。なぜ魔女裁判は近世に起こったのか。この二つの問題は本格的な研究が欧米で開始された19世紀以来、依然として根源的な問題である。本論文はこの魔女裁判の根本問題を、神話・占星術・医学思想、西欧人の世界観と密接に結びついてきたメランコリーという概念、そして社会的周縁者の問題の連関の中で、「魔女」の表象を読み解きつつ明らかにしようとするものである。

16世紀末に制作された「土星とその子供たち」と題される版画には次のような光景が描かれている。画面上方には二匹のドラゴンが曳く馬車に乗り天空を飛翔するローマ神話の神サトゥルヌス、画面下方にはその影響下にある人間たちが描かれている。サトゥルヌスは占星術における土星を意味する。地上に描かれている人々の姿には医学的な意味合いも付与されており、これらの人々は西欧近代医学の確立以前に支配的であった体液病理説における「黒胆汁を多く持つ者たち」、つまり「メランコリーに冒された者たち」を意味する。この版画には魔女とインディオが描かれているが、「土星の子供たち」は貧民、罪人、身体障害者など当時の西欧社会における周縁者を含んでおり、「最も貧しく最も蔑まれる人間」を意味していた。したがって本論文で解明する問題は次のように換言できる。魔女は西欧

近世社会において「土星の子供たち」の負性を一身に凝縮させる存在であったために大量殺害の対象になったのではないか。その負性凝縮のプロセスは社会的周縁者が「土星の子供たち」に関係している以上、「メランコリー」という概念に密接に関係しているのではない。本論文では社会的周縁者として貧民とインディオを、対象地域としてイングランドとフランスを取り上げ検討を行った。

第1章では、16世紀後半のメランコリー観の状況を古代ギリシア・ローマ時代以降のメランコリー概念史をたどることによって明らかにした。古代ギリシア・ローマ時代には二系統のメランコリー観が並存していた。一つは否定的なメランコリー観で、ヒポクラテス＝ガレノス経由の体液病理説に基づき、黒胆汁が体内で増加することにより粗暴・精神錯乱・幻覚症状などが引き起こされ、罹患の程度は老人・女性が重くなると考えるものであった。もう一つは肯定的なメランコリー観で、偽アリストテレス作『問題集』第30巻1に由来し、体液病理説をふまえながらもメランコリーを男性の天才と結びつけて考えるものであった。中世になるとキリスト教の影響もあり否定的なメランコリー観が主流となったが、中世末にフィレンツェの新プラトン主義者フィチーノが肯定的メランコリー観を復活させ、その影響は16世紀第1四半期頃まで続いた。しかし宗教改革の影響によりメランコリー観は否定的なものに反転し、16世紀後半にはメランコリーは悪魔と老女に親和性のあるものとして受容されるようになっていた。

第2章では、16世紀後半を代表する三つの悪魔学論文（ヴァイヤー『悪魔の幻惑について』1563年、ボダン『魔術師の悪魔狂』1580年、スコット『魔術の暴露』1584年）を史料として取り上げ、「魔女とメランコリー」の関係がいかにつまみ取られていたのかを検討した。大学医学部に学びユーリッヒ＝クレフェ＝ベルク公の侍医を務めたヴァイヤーは、魔女裁判を批判するため著作を出版した。ヴァイヤーによると魔女として告発されているのはメランコリーに冒された老女であり、魔女の集会への参加を始めとする自白内容はメランコリー症を原因とし、悪魔に唆された想像に過ぎない。したがって魔女は処刑されるべきではなく、医者の手任せられるべきであった。この見解を激しく批判したのがフランスを代表する大知識人ボダンである。ボダンは魔女裁判に賛成する立場からメランコリーは男性を臆想的にするものだと主張し、ヴァイヤーの見解を否定した。両者をふまえ、ヴァイヤーと同様の見解を主張したのがイングランドのジェントリ、スコットである。三者の見解を当時のメランコリー観の状況と照らし合わせた場合、説得力をもつのはヴァイヤー、スコットであり、またボダンが持論を主張する際に典拠を恣意的に扱っていることを考慮すると、ヴァイヤー、スコットの魔女像がボダンの首肯せざるをえない魔女像でもあったことが判明する。それは「メランコリーに冒された老女」という魔女像である。

第3章では、前章で検討した三つの史料において「メランコリーに冒された老女」という魔女像と貧民・インディオがどのように関連づけられ、最終的に魔女像が完成したのかを検討した。16世紀の西欧では貧民の増大が社会問題となっていた。天候不順に伴う不作と

飢饉の頻発、人口の増大に伴う失業と過少雇用、賃金低下などの諸原因により 1520 年代以降西欧各地で大量の失業者や貧民が生まれ、17 世紀初めには最悪の状態を迎えた。一方、15 世紀末の「新大陸」アメリカの「発見」は世界観を大転換させるとともに、人間観をも揺るがした。聖書に基づく人間分類法には、新大陸に居住するインディオが含まれなかったからである。1521 年教皇ユリウス二世によってインディオはアダムとイヴの子孫である旨が公布されたものの、それはハムの子としてであり、アフリカ人と同様奴隷としての身分を容認するものであった。「真正の人間」である西欧人に対してインディオは「非人間的存在」であり、その具体的イメージは食人種であった。

ヴァイヤー、ボダン、スコットの各史料において魔女と貧民は明らかに結びつけて考えられており、魔女裁判反対派と賛成派で立場は異なるものの、貧民を魔女像の重要な要素としてみなしていたことがわかる。インディオについては、ヴァイヤーとスコットはインディオの食人を実際に行われているものとみなす一方、魔女が食人を行うと考えていない。魔女を「メランコリーに冒された老女」とみなし、その救済を主張する立場の者が魔女の食人行為を認めるならば、魔女はその非人間的行為によって断罪されてしまう。魔女とインディオの食人行為を媒介にした関係性・類縁性を切断するのがヴァイヤーとスコットであるが、それを認めるのがボダンである。またボダンは『魔術師の悪魔狂』に先立つ 4 年前に出版された『国家論』のなかで、中世以来の気候風土論に従いつつインディオがメランコリーゆえに食人を行うと述べている。ボダンの二著作を総合的に検討することによって魔女・インディオ・メランコリー・食人の関係が浮かび上がり、「メランコリーに冒された老女」としての魔女像がインディオも重要な要素としていたことが判明する。このようにして 1570・80 年代に貧民とインディオが担っていた負の要素（貧困と食人）を一身に凝縮した魔女像が完成する。負の要素とは、西欧人にとって自分自身ではないものを示す他者性にほかならない。

第 4 章では、前章で明らかにした魔女像が 16 世紀後半から 17 世紀第 1 四半期にかけて、六名の著名な悪魔学者たちによってどのような形で受容されたのかを検討した。各人の魔女像はそれぞれ細部で異なりながらも、核心の部分<「貧民」と「インディオ」の要素を併せ持つ「メランコリーに冒された老女」としての魔女像>についてほぼ共通している。1570・80 年頃から 17 世紀第 1 四半期まで、当時の西欧社会における負性つまり他者性を凝縮させた魔女像が存続したからこそ魔女とみなされた人々が大規模に迫害されたのである。

第 5 章では、17 世紀中頃から魔女裁判が衰退する原因として同世紀第 2 四半期において魔女像の解体、すなわち魔女表象の変容が起こったことを明らかにした。史料として、シュペーの『犯罪への警告』(1631 年)とバートンの『メランコリーの解剖』(初版 1621 年、使用史料はバートンの最後の加筆を含む 1651~52 年にかけて出版された第 6 版)を用いた。魔女の聴罪司祭を務めたシュペーの著作は魔女裁判批判を目的として執筆されたもの

であるが、ヴァイヤーやスコットと異なり、拷問批判を中核とする。メランコリーとインディオについての言及はなく、魔女と貧民の関係性も薄い。メランコリー概念史の側面から魔女像の解体を検討するため用いたのがバートンの著作である。この書は当時のメランコリー論の集大成と言えるもので、メランコリー概念が網羅的に記述されている。この書では相対主義が貫かれており、「魔女とメランコリー」の関係についてもヴァイヤー説とボダン説が併記されている。また魔女像を構成する諸要素は、魔女と緊密に結びつけられず個々に論じられている。17世紀中頃、メランコリー概念は増殖と多岐化の極点に達し「爛熟期」を迎えていた。

第6章では17世紀第2四半期における魔女像の解体のプロセスの背景にある原因を検討し、「他者としての魔女」像の解体が西欧近代の誕生を意味することを論じた。①医学の変容による体液病理説の衰退、②貧民像の変容による貧民の脱想像領域化、③インディオ像の変容によるインディオの脱想像領域化が進行するなかで魔女像は解体していく。現実界と想像界の境界的存在としての魔女は、体液病理説におけるメランコリー概念が有効性を失い、魔女像の構成要素である貧民とインディオが脱想像領域化することにより現実性を失っていった。魔女像の解体に見られる「現実と想像の分離」を、「西欧近代の思考」の先駆者とも言えるホップズの『リヴァイアサン』（1651年）とマールブランシュの『真理探究』（1674～75年）における魔女に関する記述からも検討し、「他者としての魔女」像の解体が西欧近代の誕生を意味することを裏づけた。